

## 巻 頭 言

校長 執行 暢

教員をしていて良かったと思うことに生徒の変化や成長との出会いがあります。特にそれが劇的だった時の印象と驚きは大きなものです。そんな出会いの一つを紹介します。

私はその女子生徒を2年次と3年次に担任しました。その2年次に、当時開業して間もないキャナルシティ博多劇場に学校の芸術鑑賞行事で観劇に行きました。その日の演目は劇団四季の『オペラ座の怪人』でした。

その帰りのバス中で見た彼女の表情は本当に印象的でした。

やや上気した頬で、どこか宙を見るような目。一見すると何かにとりつかれているようにも見えました。まさに興奮冷めやらずといったところだったのでしょう。

数日後、その女子生徒は私に「大学で声楽を勉強したい」と言って来ました。

年度当初の面談の時に「短大に行って将来は家でピアノを教える」と言ってから2ヶ月程ではなかったかと記憶しています。どうして大学に行きたくなったのかと問うと、「声楽を勉強して劇団四季に入り、舞台に立ちたい」というのが彼女の答えでした。

その時の私の心境はというと、驚きと心配が半分半分といったところだったでしょうか。心配の要因は大学入試でした。

当時私が居た学校は普通科高校で、本校のように芸術科があるわけではありません。ほとんどの生徒が大学への進学を希望していましたが、芸術分野への進学はほぼ実績がありませんでした。また、芸術分野の入試では実技が大きな割合で評価され、高校時代のコンクール等での成績も重視されるだろうことも想像出来ました。音楽部で合唱をしていること以外特別の実績のなかった彼女が入試を突破できるのか、大きな不安でした。

しかし、それからの彼女の努力も忘れません。授業と音楽部の活動が終わった後、ほぼ毎日レッスンに通いました。帰宅するのは深夜。保護者の努力も並大抵ではなかったはず。

幸い、努力の成果がコンクールの成績に表れ始め、彼女にとって大きな自信となって行きました。それにともない志望校もランクアップし、ついに東京芸術大学の声楽科を目指し始めます。勿論、担任の不安など意に介することはありませんでした。

結果を言うと、彼女は東京芸術大学音楽学部声楽科に現役で合格、大学卒業と同時に劇団四季に入り、目標であった『オペラ座の怪人』の舞台に立ちました。

私は彼女から、福岡公演の折に連絡をもらい、キャナルシティに観に行きました。

終演後に食事に行ったのですが、そこで彼女は、舞台の演出のことや衣装のこと、普段の練習や劇団内での競争の厳しさ等々、多くの話をしてくれました。愚痴もありましたが、充実感が伝わってくる話ぶりでした。

現在彼女は退団し、舞台には立っていませんが、一人の生徒が、一つの感動体験から大きな夢を叶えていく姿を見せてくれたのです。

私の思い出話が、皆さんの勇気に繋がってくれればと願っています。